

私の顔を「テロリストみたい」と言う人がけっこういる。私自身も、たしかにそんな感じがしないでもないなあと思わざるをえない。でも、ただ「テロリストみたい」では嫌なので、「知的なテロリストみたい」と自称しようと思った。しかし、自分で自分のことを「知的」と言うと思われぬ恐れがある。なので、生意気な感じを薄めるために前フリをつけることにした。「チョット疲れ気味の知的なテロリストみたい」。

ところで、私はアメリカに出かけることが多い。宇宙飛行の訓練でアメリカに滞在している女房を訪ねるためとか、大好きな大リーグの試合を観戦するためにだ。

アメリカの空港に到着すると、私は毎回必ず、他の方々が経験しないことを経験する羽目になる。持参している物を徹底的に調べられるのだ。まず、スーツケースを開けさせられ、中身を調べられる。スーツケースの中に箱があれば、その中身まで調べられる。次に、着ているジャケットを脱がされ、ジャケットのポケットの中身まで調べられる。

私だけが毎回こんなことをされるのは、もちろん「チョット疲れ気味の知的なテロリストみたい」な顔のせいだ。では、毎回こんなことをされるのを私は不愉快に思っているか



絵・江口修平

紙幣の数え方

向井万起男

というと、そんなことはない。もう慣れてしまつて、調べられるプロと化している。プロは専門分野では真剣だが、楽しむ余裕も持っているものだ。で、私も真剣に、そして楽しむ余裕を持つて調べられることにしている。

さて、私の持参物を調べている係官を真剣に、そして楽しむ余裕を持つて眺めるようになった私は、不思議なことに気付いた。係官は私の財布の中の札束まで数えるのだが、その数え方が変なのだ。

係官は私が持参しているアメリカのドル紙幣も日本の紙幣も数えるのだが、どちらもパッパッとヤケに早く数えるのだ。係官にとってアメリカのドル紙幣は自国のものだから早く数えられるのかもしれない。でも、日本の紙幣までそんなに早く数えられるものだろうか？ 日本人の私より早く一万円札か五千円札か千円札が見分けられるものだろうか？

係官は日本の紙幣を数えるポーズをとっているだけで真剣には数えていないのではないのか。そんなスタンスでは、「元気一杯の粗暴なテロリスト」がアメリカに持ち込む危険物を見落としてしまうこともあるのではないか。私は心配だ。

むかいまきお●医学博士。1947年、東京生まれ。1972年、慶應義塾大学医学部卒業。現在、慶應義塾大学医学部准教授、病理診断部部長。著書：『君について行こう』（上下巻）、『続・君について行こう 女房が宇宙を飛んだ』、『ハードボイルドに生きるのだ』（いずれも講談社＋α文庫）。最新刊『謎の1セント硬貨 真実は細部に宿る in USA』（講談社）で第25回講談社エッセイ賞を受賞。

